

祭文松坂『阿波の徳島十郎兵衛』

—校注補訂 替女唄段物集の試み・その三—

板垣俊一

Awanotokushima Jurobee

—An attempt to make a Collection of GOZEUTA (No.3)—

Shun'ichi Itagaki

〈凡例〉

一 底本に相当するものは、新潟県新発田市教育委員会所蔵の、一九七三年八月に録音された小林ハル演唱『阿波の徳島十郎兵衛』（全四段）録音テープである。長岡系替女小林ハルの伝承する替女唄は、一九七三～四年に『替女唄記録保存事業』として新発田市教育委員会の委嘱を受けた佐久間惇一・森田国昭・橋本節子三氏が録音資料を作製しており、その歌詞はすでに佐久間惇一編『阿賀北替女と替女唄集』（一九七五年）に掲載されているのでそれを参照したが、再び右の録音資料に戻って確認作業を行なった。この作業による訂正は一々注記しなかった。

二 校訂の参考に使った資料は、新発田市教育委員会所蔵の土田ミス（長岡系替女、一九〇九～七八）演唱『巡礼おつる』（全四段）録音テープ、および伊藤太郎・藤田治雄「しもかわ替女坂田とき聞書」（『高志路』二二三号、一九七一）所収『巡礼おつる』（全四段）である。これらによって小林ハルの歌詞を補訂した。なお、高田替女の伝承する歌詞はない。脚注の「小林」は小林ハル、「土田」は土田ミス、「坂田」は坂田ときを指す。（土田ミス伝承の歌詞は、小林ハル伝承の歌詞とはほぼ同じである。）

三 録音資料であるため、聴き取りにくい部分があるが、前後の文脈から

妥当と思われる文句を校訂者の私意によって当てた。ただし、私意によって判断できない部分は、小林ハル本人に直接確認した。小林ハル女は一九〇〇（明治三三）年生まれで、一九七八年に長岡系替女唄伝承者として、国の「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」保持者に指定され、九十八歳を超えた今もなお健在である。また、前後の文脈上何らかの文句が脱落していると思われる部分も、一部まったくの私意によって補った。

四 文句は文語調であるが、旧仮名遣いの拠るべき基準が定められないことから、表記については現代通用の仮名遣いとした。

五 近松半二等の合作浄瑠璃、明和五（一七六八）年初演『傾城阿波の鳴門』の文句は、続帝國文庫『近松半二浄瑠璃集』に拠り、私意によって多少表記を改めた。脚注の「阿波の鳴門」、また「半二の浄瑠璃」は、この浄瑠璃を指す。

六 脚注の漢数字は本文の注釈、（ ）のアラビア数字は補訂および校異の注記である。

七 私意によって各段に見出しを付けた。

祭文松坂『阿波の徳島十郎兵衛』

一段目（巡礼の段）

さればに アーよりては これにまた
いずれに愚かは なけれども

何新作の なきままに

古き文句に 候えど

阿波の徳島 十郎兵衛の

一人娘に お鶴とて

年はようよう 九つで

背なに笈摺 手にひしやく

巡礼に報謝と 言うて廻る

廻り来たのが どこなるや

摂津の国は 大坂で

玉造村にて さしかかる

またも報謝と 立ち寄れば

お弓我が子と 知らずして

どれどれ報謝 進しよう

思わずそばへ 駆け寄りて

顔つくつくと うちながめ

さてしおらしい 巡礼の子と

背なの笈摺 見てあれば

同行二人と あるからは

定めし連れ衆は 親御たち

それ聞くよりも 巡礼は（一）

申し上げます 小母さんよ

親子の連れなら よけれども
わたしが三つの その年に
ふた親様と 申するは
わたしを祖母さんに あつらえて
どこのいづくへ 行きしやら

風の便りも なきゆえに

それでわたしは 一人旅

親を尋ねに 廻ります

お弓はそれを 聞くよりも（二）

親を尋ねに 廻るとは

可哀そうでは ないかいと

口には言えど 心では

思い廻せば 廻すほど

さて我々も その通り

国を駆け落ち 致すとき

三つになりしの 娘をば

母上様に あつらえて

国を駆け落ち 致したが

指折り数えて みてあれば

ちようど今年で 九つじや

見ればこの子と 申するは

十にも足りない 娘じやが

もしや我が子で ないかいと

国名を聞いて みるものと

これのういかに 巡礼よ

国はいずくで あるぞえの

それ聞くよりも 巡礼は

申し上げます 小母さんよ

国は阿波の国徳島の家中でございます

一 「年はやう／＼とを／＼の、道をかけたる笈摺に、
同行二人とせるせしは」（阿波の唄門・八段目）

二 笈摺は、巡礼が着た袖無し羽織の様なもので背に布
が一幅縫い付けてある（娯遊笑覧・七）。親の有る無しで
色分けがしてあった。「笈摺も二親の有る子じやによつ
て、両方は茜染」（阿波の唄門・八段目）

三十郎兵衛とその妻お弓が、紛失した藩主の宝剣を探
すために、盗賊に身をやつて隠れ住んでいる所「浪花
の町はづれ、玉造に身を隠す、阿波の十郎兵衛」（阿波の
唄門・八段目）

四 可愛らしい。「順礼に御報謝と、いふも柔しき国なま
り、テモしほらしい順礼衆」（阿波の唄門・八段目）

五 本来、仏（親世意菩薩）と二緒であることを意味す
る。「同行二人とせるせしは、一人は大悲のかけ頼む」（阿
波の唄門・八段目）

六 「定めて連れ衆は親御達、国は何国と尋られ」（阿波
の唄門・八段目）

七 「どふした訳じやしらぬが三つの年に、とゞ様やかゝ
様も、わしをばと様に預けて、どこへやいかしやんし
たけな」（阿波の唄門・八段目）

八十郎兵衛は、かつて、阿波の城主玉木衛門之助の江
戸家老松井主膳の中間であつたが、酒席の争いから、国
家老小野田郡兵衛の家に手傷を負わせた科で勘当を受
け、三歳の娘を母に預け、女房お弓と共に国を出た（阿
波の唄門）。

九 「の」は不要だが文句の音数を整えるためのもの。

一〇 半二の浄瑠璃に比べ、替女唄では我が子の認知を
長引かせることで母親の心の揺れを一層細かく語る。

一一 徳島の藩士。徳島城主は史実では蜂須賀氏だが、半
二の浄瑠璃では玉木衛門之助。替女唄では十郎兵衛を藩
士とする。

（一）「お鶴はそれと聞くよりも」（土田）

（二）「お弓はそれと聞くよりも」（土田） 土田の文句
は全て「それと…」。

お弓はそれを 聞くよりも
阿波の国と 聞くからは
さて珍しや なつかしや
わしが生まれも 阿波の国
我が子のお鶴で ないかいと
言わんとせしが 待てしばし
徳島と言うても 広い家中
人まちがいでは ならんぞと
ふた親の名を聞いて みんものと
これのういかに 巡礼や
ふた親の名は何と 申すぞえ
それ聞くよりも 巡礼は
三 申し上げます 小母さんへ
四 とさんな阿波の徳島十郎兵衛と申します
五 か様お弓と 申します
我が名はお鶴と 言います
お弓はそれを 聞くよりも
これが我が子のお鶴かと
思わずわあっと 泣き出だす
五 ここで親子と 名乗ろうか
いや待てしばし 我が心
親子名乗りは 致されぬ
我が夫の 十郎兵衛は
六 刀の詮議の 送るために
七 山賊渡世で 世を送る(一)
今朝も悪人の 武太六が
わすかの金子に 目をくれて
大坂町の 奉行所へ
訴人するの ことなれば

今にも捕り手が 来たならば
縄目に及ぶ 我々じゃ
なんで親子と 名乗らりよう
名乗れば同罪の 罪じゃもの
名乗って憂き目を 見せんより
いっそ名乗らず 帰そうと
いや待てしばし 我が心
ここで親子と 名乗らずわ
どこのいずくへ 廻りても
親という人 ほかはない
なんとしようぞえ どうしようと
しばし涙に くれにける
ようよう涙の 顔を上げ(二)
このういかに 巡礼や
はや昼飯の ころなるに
八 昼飯食べて 行きやえよと
言われてお鶴は 遠慮なく
九 しからばお世話に なりましょと
一〇 甲掛け草鞋の 紐を解き
二 足を濯いで 上がるる
三 足も一座の 上様へ
まだ行く末は ほど長い
読めばりかいも 分かれども
まずはこれにて 次の段
二 段目(子別れの段)
ただいま読んだる 段のつぎ
事は細かに 読めねども

一 巡礼の娘の素性が少しづつ明かされ、それに伴って
お弓の心の動揺が増す、という語りの工夫になっている。
二 慣用句の表現
三 お弓の心の動揺に対して、娘はまだ何も気付いてい
ない。

四 「とく様の名は阿波の十郎兵衛、か様はお弓と申
します」(阿波の鳴門・八段目)

五 慣用句。

六 酒席の過ちから勘当されている彼は、紛失した藩主
の宝剣を探して、勘当を許してもらおうと、今では
盗賊に身をやつしている。(阿波の鳴門・三段目)

七 半二の浄瑠璃にも「阿波の海賊十郎兵衛」の語が唐
突に出る(二段目) ように、十郎兵衛は海賊として有名
だったが、しかし、半二の浄瑠璃が陸上の盗賊に替え、
替女唄はさらに山賊に替えた。また、半二の浄瑠璃以前
は悪人として登場した。

八 半二の浄瑠璃では、約束の日限に借金を返さないの
で、武太六が十郎兵衛を代官所へ訴えることになってい
る。

九 逮捕されること。

一〇 親の罪によって子も処罰されるなどの縁座制は、
江戸時代の刑罰において広く適用された。(石井良助「日
本刑事法史」)

一一 足の甲を覆って保護する旅行用の履物。

一二 半二の浄瑠璃では、娘を家に上げることはいない。
この場合、子別れする母の嘆きを強調するための引き延
ばしと考えられる。ただし、柳亭種彦の読本「阿波渡鳴
門」(文化四年刊)にもある。

(一) 「山賊渡世で日を暮らす」(土田)

(二) 私意により、慣用句を以て補記。「涙の顔を払われ
て」(小林)

粗々読み上げ 奉る
旅の疲れで お鶴こそ
現在母とは 露知らず
お弓の膝を 枕にし
ついすやすやと 眠りける
お弓はそれを 見るよりも
現在親子で ありながら
親子名乗りが できぬとは
いかなる前世の 報いやと
お弓はわっと 泣き出だす
時も移れば はやいもの
七つの刻にも なりぬれば
お鶴はふうと 目を覚まし(1)
お弓の顔を 打ちながめ
申し上げます 小母さんへ
なぜそのように 泣かしやんす(2)
あなたがそのように 泣かしやれば
わたしの母かと 思われて
どこへも行きとは ごさんせぬ
せめてお前の おそばに
三日も泊めておいて 下さいと
両の袂に 泣きすぎる
お弓はそれを 見るよりも(3)
ここで親子と 名乗ろうか
いや待てしばし 我が心
親子名乗りは 致されぬ
これのういかに 巡礼よ
お前の母では ないぞえの

われはよその 小母だぞえ
むごいことを 聞くゆえに
涙が出て ならぬぞえ
手拭いにて ふき取りて
さらばだまして 帰さんと
これのういかに 巡礼や
あいにく今日と 申するは
夫の留守の ことなれば
泊めて置くこと ならぬぞえ
さぞや我が家に 祖母様が
必ず案じて ごさんしよの
大方お前の ふた親も
我が家へ帰るで あろうぞえ
お前はこれよりどこへも行かずして
祖母様方へ 帰らんせ
言われてお鶴は 是非もなく
さらばそれなら 参じます
いかに世話に なりました
優しきいとまを 致されて(4)
甲掛け草鞋の 紐を締め
泣く泣くその場を 出でらる
お弓はそれを 見るよりも
これのういかに 巡礼や
忘れたことが あるぞえの
はやく戻れと ありければ
お鶴ははつと 戻らるる
お弓は手箱の 中よりも
小判一枚 取り出だし
これのういかに 巡礼や

- 一 本当の。
- 二 柳亭種彦の読本「阿波濃鳴門」にも、「お弓が膝を枕として、旅寐の夢をぞむすびけり」と、類似的表現がある。半二の浄瑠璃には無し。
- 三 土田はここで段切り。
- 四 夕方、四時前後。
- 五 「なだめすかせば聞き分て、アイ／＼泰ふござります、お前が其様にいふて、泣て下さりますによつて、どふやらかゝ様のやうに思はれて、わしや笑がいにもない」(阿波の鳴門・八段目)
- 六 「お前の傍にいつ迄も、わしを置いて下さりませ」(阿波の鳴門・八段目)
- 七 「袂に……する」は、警女唄の慣用句的表現。
- 八 慣用句。
- 九 可哀そうなこと。
- 一〇 よく言い聞かせ、なだめすかして、の意。なお、はるばる訪ねてきた我が子に、親が名乗らない例に「石童丸」がある。
- 一一 「ごをしゃうとに尋ふより、其はと様の方へいんで居るとの、追つ付きとゝ様やかゝ様が逢ひにいてじや程に、悪い事はいはぬ、思ひ直して是から直に国へいんで、随分まで親達の、尋て行かしやるを待て居るのがよいぞや」(阿波の鳴門・八段目)
- 一二 とても。大変。
- 一三 けなげに別れを告げ、の意。
- 一四 出発するための旅装。
- 一五 「針箱の、底をさがして豆板の、まめなを悦ぶ饒別と」(阿波の鳴門・八段目) 「あたりの手箱ひきよせて、小金一両とりだし」(柳亭種彦「阿波濃鳴門」) 種彦の読本も何等かの語り物に拠ったか。
- (1) 「眠りしお鶴は目を覚まし」(土田)
- (2) 「どうやらあなたが泣かしやれば」(土田)
- (3) 「お弓はそれと聞くよりも」(土田)
- (4) 土田の文句で補う。

僅かなれども 報謝ぞと
 差し出だせば 巡礼は
 申し上げます 小母さんへ
 国を出る時 祖母様に
 小判というもの わたくしは
 たんともううて きましたよ
 要りませないと 辞退せば
 お弓はそれを 聞くよりも
 これのういかに 巡礼や
 歌の文句じゃ なけれども
 旅は道連れ 世は情け
 情けが無ければ 渡られぬ
 お前は一人旅の ことなれば
 お金が道連れで あるぞえの
 金さえたんと 持つならば
 どこのどなたも 泊めるぞえ
 これを仕舞えと 言うままに
 無理に持たせて お弓こそ
 髪撫で上げて くれいたり
 涙に暮れて 居たりしが
 それ見るよりも 巡礼は(1)
 申し上げます 小母さんへ
 お金は持つて おるけれど
 一人旅の ことなれば
 これまで尋ねて 来たけれど
 泊めてくれる人は ないわいの(2)
 艱難致して 来ましたよ
 野に寝たり 山に伏し
 人の軒場を かり寝せば

情け知らずの 子供衆は
 乞食そちへ 行けなぞと
 幣を持つて しわぐやら
 その時の せつなさは
 なんと言うべき 方もなく
 ふた親そばに おるならば
 こんな難儀も あるまいに
 よその子供衆 見るたびに
 髪結い直して もらったり
 衣裳着替えて もらったり
 夜は抱かれて 寝やしゃんす
 わたしもかか様 あるならば
 あのよに致して もらわんと
 これまで尋ねて 来ましたよ
 これはどお大慈悲を 頼むのに
 仏の利益が 無いものかと
 お鶴はわつと 泣き出だす
 お弓はそれを 見るよりも(3)
 堪え堪えし 溜め涙
 一度にわあっと 泣き出だし
 急ぎ来る胸を 撫で下げて
 早くだまして 帰さんと
 これのういかに 巡礼や
 七つの刻にも なりぬれば
 早く帰れと 急ぎ立てる
 急ぎ立てられて お鶴こそ
 もらい受けたる その小判
 守り袋に 仕舞われて
 さらばそれなら 参じます

一 「銀は小判といふ物をたんと持っております、そんなりやもふさんじます」(阿波の鳴門・八段目)

二 たくさん。

三 要りませんと。

四 諺。清元など邦楽の詞章にも使われている。

五 「同行二人」とあったように、巡礼にとって宗教的な道連れは仏(観世音菩薩)・四国巡礼者の場合は弘法大師)であり、金は世俗の道連れである。しかし、お弓の言葉と逆に、金は娘の命を落とす仇となった。

六 髪を撫で上げてくれた。

七 「悲しい事は独り旅じやて、どこの宿でも、とめてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては寝たり、こはい事や悲し事、とく様やかゝ様と一所に居たりや、こんなめには逢ふまい物を」(阿波の鳴門・八段目)

八 たたく、打つ、の方言。

九 「余所の子共衆が、かゝ様に髪結ふて貰ふたり、夜は抱れて寝やしゃんすを、見るとわしもかゝ様が有るなら、あの様に髪結ふて貰ふ物と、羨しうござんす」(阿波の鳴門・八段目)

一〇 衆生を哀れむ観世音菩薩の心。下に、「大悲の観世音」とある。

一一 がまんにかまを重ねて耐えていた、の意。「こたへくし悲しさを一度にわつと溜め」(浄瑠璃「伽羅先代萩」六段目)

一二 以下三行既出。定例表現。

- (1) 「お鶴はそれと見るよりも」(土田)
- (2) 「誰でも泊める人はない」(土田)
- (3) 「お弓はそれと聞くよりも」(土田)

いかにお世話に なりました
優しきいとまを 致されて
胸に掛けたる 鉦を打ち

南無や大悲の 観世音

札所一番 那智山

二番紀の国 紀三井寺

父母の恵みも深き 粉河寺

仏の誓い 頼もしきかなと

御詠歌とともに 走り出で

さても一座の 上様へ

まだ行く末は ほど長い

下手の長読み 飽きがくる

まずはこれにて 段の切り

三段目(子殺しの段)

お弓はそれを 見るよりも

我が子の可愛さ 身に余り

これのういかに 巡礼よ

はるか向こうへ 行くならば

三本道が あるほどに

右へ行けば 大坂じや

左へ行けば 山道じや

必ず必ず 迷うなよ

親子の縁に 引かされて

うしろ姿の 見えるまで(1)

あと見送りで いたりしが(2)

やがて姿は 雲霞

お弓ははっと 心づき

あの子今晚 泊め置いて
夫の帰らた そのときに
相談致して 名乗らんと
そうじゃそうじゃと お弓どの(3)

どれこれよりも 行てこうと

前垂れ一筋 しめられて

乱れし髪を なで上げて

我が家の方を あとに見て

飛ぶがごとくに 今のはや

お鶴の後を 慕いける

それはさておき お鶴こそ

三本道に なりぬれば(4)

幼い子どもの 身であれば

お弓の言うこと 打ち忘れ

右の大坂へ 行かずして

左の山道 踏み迷い

行けば行くほど 道せまる

草ぼうぼうと 生え茂る

水はさあざあと 流れ行く

御寺々には 暮れの鐘

心細さは 限りなし

杖を力に たどたとと

山坂指して 登らるる

はるか向こうの 方よりも

鬼もあざむく 十郎兵衛は

鉄砲肩に 掛けられて

山坂よりも 下らるる

行き違わんと 致せしが

これのういかに 巡礼や

一 「どこをどうして尋た、と」様や、かゝ様に逢れる事ぞ、あはしてたへ南無大悲の観音様、父母の恵みも深き粉川寺、仏の誓い頼もしきかな(阿波の鳴門・八段目)

二 西国三十三ヶ所観音霊場巡り札所一番は、和歌山県那智勝浦町の青岸渡寺。山号那智山。本尊、如意輪観音。

三 札所二番、和歌山市の紀三井寺。本尊、十一面観音。四 和歌山県那智郡粉河町にある三番札所。本尊、千手千眼観音。「粉」に「子」を掛け、父母の恵みも深き子、の意で続ける。なお、四番札所は大阪府和泉市の施福寺。

五 番札所は大阪府藤井寺市の葛井寺。次は奈良県と続く。五 三叉路。

六 以下、お弓が思い直してお鶴を連れ戻そうとする展開は、半二の浄瑠璃と同じ。「イヤ」どと思ひ諦めても、今別れては又逢ふ事はならぬ身の上、譬へ難儀がかゝらばかゝれ、又其時は夫の思案、程は行まい追付て、連て戻らふそふじや」と、子に迷ふ、道は親子の別れ道(阿波の鳴門・八段目) ただし、半二の浄瑠璃では、

家を出て行くお弓と入れ違いに、十郎兵衛がお鶴を連れて家に戻る。浄瑠璃の場合、舞台の固定した場面に人物が出入りするよう工夫されているからである。

七 お鶴が道に迷うところ、半二の浄瑠璃には無い。山道に迷つて受難となる展開は、むしろ柳亭種彦の読本「阿波濃鳴門」にある。この相違は、舞台を前提とする制約を受けるか否かにもよる。なお、玉造から阿波へのルートは実際の地理を反映したものではない。

八 鬼をあざむく、である。鬼と見誤るほど勇猛な怖いさま。

(1) 「うしろ姿を見送りで」(土田)

(2) 坂田の文句で補う。

(3) 以下「そうじゃそうじゃとお弓どの」お鶴の後を慕いける」の七行、土田の文句で補う。この部分、小林の文句は、「あとを慕うてみたけれど」お鶴の行き方はさらに知れない」との二行のみ。

(4) 土田の文句で補う。

どこへ行くと ありければ
それ聞くよりも 巡礼は
申し上げます 小父様へ
わたしや大坂へ 行きます
それ聞くよりも 十郎兵衛は
大坂へ行くと あるならば
おまえは道に 迷うたが(1)
小父と一緒に 来たれよと
お鶴の手を引き だんだんと
玉造指して 急がる
ようよう村近くに なりぬれば
もはやその日も 暮れにける(2)
月の明りで 十郎兵衛は
娘の姿を 打ちながめ
さてこの巡礼と 申するは
お金をたんと 持つ様子
この子の金を 借り受けて
あの武太へ 済ますなら
我が身の悪事も 知れまいと
さらばだまして 金を借り(3)
そうじゃそうじゃと 十郎兵衛は
これのういかに 巡礼や
このや街道と 申するは
このたび物騒につき
おいはぎ泥棒が 沢山じゃ
そちはお金を 持つ様子
無用心で あるぞえの
小父に貸しては くれぬかえ
それ聞くよりも 巡礼は(4)

申し上げます 小父様へ
お金を持って いるけれど
国を出る時 祖母様に
人がどのように 言うたとして
ふた親様に 会うまでは
決してこの金 離すなど
かえすがえすの お言葉じゃ
わたしやいやじゃと 言うままだに
我が身の懐中へ 手を入れる
それ見るよりも 十郎兵衛は
さてこの巡礼と 申するは(5)
年こそゆかぬと いいながら
手ごわい奴じゃ ないかいの
言い出すからは 是非もない
威しにかけて やらんぞと
貸してくれと 言うままだに(6)
お鶴の懐中へ 手を入れる
お鶴ははっと 驚いて
ああ恐ろしや人殺しと 鳴り立てば
それ聞くよりも 十郎兵衛(7)
鳴り立てられてこれはたまらない(8)
近所へ知れては ならんぞと
お鶴の口へ 手を当てる
幼い子どもの 身であれば
手を当てられたる ばかりにて
そのまま空しく なりにける
それ見るよりも 十郎兵衛は
さて悪いことを 致したが
殺す気でも 無かったが

- 一 「ドレ伯父が預かつてやらふ、爰へ出しやと、武太六に約束の足にもなるかと心の工面、だましかくれど合点せず」(阿波の鳴門・八段目)
- 二 「此小判の財布には、大事の物が包んで有る程に、人に見せなとば様が言はしやんしたによつて、誰にもやる事成りませんと」(阿波の鳴門・八段目)
- 三 前段の母親の場面では、母が我が子と知りつつ名乗れないところに悲劇が生じた。ここでは、聴察が二人の親子関係を知っているのに当事者間の認知が後れているところに悲劇が生じる。
- 四 このあたり、山賊渡世の十郎兵衛が、お鶴から金を奪う話は、『仮名手本忠臣蔵』五段目(山崎街道)の定九郎と手市兵衛の話に似ている。また、巡礼が山道で山賊に会い、小判を奪き上げられる話には、『焼山峠巡礼殺し』があり、これも口説節や越後高田替女の段物など俗曲に歌われている。
- 五 「コリヤやかましい、近所へ聞へる、声が高いと口へ手をあて」(阿波の鳴門・八段目)
- 六 「息も通はぬ即死の有様」(阿波の鳴門・八段目)
- (1) 坂田の文句で補う。
- (2) 土田の文句で補う。
- (3) 土田の文句で補う。
- (4) 「お鶴はそれと聞くよりも」(土田)
- (5) 坂田の文句で補う。
- (6) 土田の文句で補う。
- (7) 土田の文句で補う。
- (8) 坂田の文句で補う。

死んだる者は 是非もない
お鶴の懷中へ 手を入れて(1)
守り袋を 取り出だし

見れば小判が十枚 小金が五十匁
そのほか一通書付 添えられて

月の明りで 十郎兵衛は
上書きさつと 見てあれば

どうやら見覚えの ある筆の跡
子細は書付に あるであろ

さらば我が家へ 急がんと(2)
死んだるお鶴を 背なに負い

斯かるその場を 足早に(3)
我が家を指して 急がるる

さても一座の 上様へ
まだ行く末は あるけれど

下手な長読み 飽きかくる
一息入れて 次の段

四段目(帰国の段)

かくて我が家に なりぬれば
お弓お弓と 門の戸を

たたけどお弓は 返事なく
がてんの行かぬ ことなると(4)

我が家へ入りに 見てあれば
暗さは暗し 真の闇

お弓の姿 さらになし(5)
死んだるお鶴を 寝せ置いて

行燈ありあけ かき照らし

書付開いて 見てあれば
国を駆け落ち 致すのち

いまだ風の便りも なきゆえに
お鶴を以て 尋ねさせ

国次の 宝剣の
ありかが知れて あるからに

巡り合うたる そのときは
ふたたび国へ 立ち帰り

君に忠義を 尽くせよと
筆こまごまと 書きしるし

母上様の 手跡なる
それ見るよりも 十郎兵衛は

嘆きの中の 喜びじゃ
この書付が あるからは(6)

今でも捕り手が 来たならば
斬って斬って 斬り払い

血の池地獄を しつらえて
ふたたび国へ 立ち帰り

君に忠義を 尽くさんと
待ちいるところに 女房は

氣に氣を揉んで 馳せ来たり
申し上げます 夫上様

今日はいかなる 吉日で
国のお鶴が 尋ねきて

親子名乗りを 致そうと
思えど縄目が 恐ろしゅうて

親子名乗りを 致さずに
ここを帰して 見たけれど

あの子を今晚 泊め置いて

一 小玉娘(豆板娘)。「りや小玉が五十匁計り」(阿波の鳴門・八段目)

二 背負い。なお、前述のように、半二の浄瑠璃ではお鶴の死が帰宅の後である。

三 段切りの文句の例に、今回の補訂作業の参考とした坂田ときの文句では、段を切るとき、「ちよいと止め置く次第なり」と歌い納め、二段目以降の読み始めを、「またも嘆きで読み上げる」と始める。なお、そのほか、「さて二段目にかかりますときは、只今読み上げし段の次ぎ……と出ます。……一段の段切れでは、さて皆様にもなたにも、ちよつとかしこにとどめおき、次の段にて別れます、といつて休みます」といった例もある(郡司正勝「替女物語」)。

四 以下、国元の母親からの書状。宝剣が見つかり、十郎兵衛はもはや盗賊をする必要のない情況にあった。即ち、お鶴を殺すような事態が避けられる情況下にありながら、しかし、お鶴を殺すことでそのことが初めて判明する、という、事の順序の逆転が引き起こす悲劇。半二の浄瑠璃では、十郎兵衛がお鶴を我が子と知るのはお弓の言葉からで、国元からの書状を見るのはその後である。

五 十郎兵衛が探していた藩主の宝剣。宝剣紛失の次第は半二の浄瑠璃に詳しくあり、替女唄でもそれが背景となっている。即ち、宝剣を預かる十郎兵衛の主人、江戸家老桜井主膳を陥れ、藩政をほしいままにせんと企む國家老小野田郡兵衛が盗み取っていたのである。

六 罪のない娘まで捕らえられるのを恐れて。

(1) 坂田の文句で補う。

(2) 坂田の文句で補う。

(3) 坂田の文句で補う。

(4) 坂田の文句で補う。

(5) 坂田の文句で補訂。「お弓の行き方はさらに知れませぬ」(小林)

(6) 坂田の文句で補う。

あなたの帰りました。その節に
相談致して、名乗らんと
跡を慕うて、みたけれど

お鶴の行き方はさらに知れませぬ
いかが致して、よからうと
それ聞くよりも、十郎兵衛は

これのういかに、お弓殿
山より帰りし、道すがら
とが一緒に連れて戻りてあるぞいの

お弓はそれを、聞くよりも
どれどこにおりました
それそこに寝ておると

聞いてお弓は、立ち上がり
お鶴のそばへ、寄り添うて
これのういかに、お鶴やい

母のお弓が、来たわいの
お鶴お鶴と、呼び起こす
言えどもお鶴は、返事なく

これのういかに、お鶴やい
旅疲れとは、言いながら
幼心の、ことなれば

帯も解かず、それなりに
眠っておるか、これお鶴
言えども返事の、無きゆえに

またもお鶴を、抱き起こし
顔つくづく、見てあれば
はや息絶えて、見えにける

お弓ははっと、驚いて
申し上げます、夫上様

お鶴は死んで、おりました
いかに山賊、せばとても
いかなる天の、業罰で

現在我が子を我が手に掛けて殺すとは
いかなる前世の、報いやと
お弓はわっと、泣き出だす

さいぜん名乗った、ことならば
こんな嘆きも、あるまいに
堪忍してくれ、お鶴やえ

鬼もあざむく、十郎兵衛は
親子の情に、引かされて
男涙を、はらはらと

南無阿弥陀仏を、唱わるる
それはさておき、捕り手の衆
表の方より、十五、六人

十郎兵衛館を、取り巻いて
どやどやどやと、入り来る
それ見るよりも、十郎兵衛は

心得たりと、身構えし
身構えあれば、捕り手の衆
緋房の十手を、さしかざし

暫く仕合いと、見えにける
はやそのひまに、お弓殿
傍なる火鉢を、引き寄せて

大勢めがけて、投げ付ける
灰はばっと、飛びにける
大勢の目口へ、入り来る
はやそのひまに、十郎兵衛は
二人三人、斬り殺し

一 十郎兵衛の言葉。「ソレその蒲団の内に、よふ寐入
て居るわいと、いふにふしんも立竊の、蒲団を明けて顔
見るより、ヲ、ほんに娘じゃ、ヲ、姉じゃ……笠箱はづ
し帯とく、見れば手足もひへ渡り、息も通はぬ娘の
死骸」(阿波の鳴門・八段目)

二 「葛の葉子別れ」には同じ文句がある。

三 半二の浄瑠璃では、娘の死骸を前に国元の老母の手
紙を夫婦で読みながら、さらに愁嘆の場面が続く。

四 十手は、江戸時代に犯罪者を捕縛する捕り手の役人
が持った短い鉄の棒で、柄に房紐を付ける。房の色は、
関西の手力・同心の場合、朱赤色と紫色の二種類が現存
するという。また、江戸町方手力・同心の房紐は銅朱色
という。(名和弓雄「十手・捕縛事典」)

※阿波の徳島十郎兵衛(補注) 悪人が実は善人であつ
たという物語の解釈の仕直しは浄瑠璃の常套手段であ
り、近松半二等の「傾城阿波の鳴門」でも、それ以前、
海賊として登場していた十郎兵衛を忠義の男に作り替え
ている。しかも、半二の浄瑠璃では、十郎兵衛の悪事は
もっぱら陸上の盗み騙りであり、海賊する場面はない。
しかし、「阿波の海賊十郎兵衛」(三段目)、「阿波の十郎兵
衛と言ふ海賊」(四段目)の語があり、作り替え以前の海
賊十郎兵衛をはめかしている。後、文化四(一八〇七)
年刊、柳亭種彦の「阿波渡鳴門」という読本では書き出
しに、「彼阿波の鳴門」と題号せし、浄瑠璃本に、十郎兵衛
といへる者あり、主君の為に千辛万苦して遂に其志をと
げしごとく書なせしは、実ににくむべきの盗賊なり」と、
半二等が広めた十郎兵衛善人説を批判する。

お弓この場を 逃げようと
死んだるお鶴を 背なに負い
徳島指して 急がるる
道も急げば はやいもの
鳴門の渡に さしかかる
不思議なるかな 後ろより
とと様かか様と 呼ぶ声ある
夫婦の者は 聞くよりも
後ろの方を 見てあれば
紫雲の雲が 棚引いて
死んだるお鶴は 昇りゆく
我が子のお鶴は 降りくる
夫婦の者は 見るよりも
途方に暮れて 居たりしが
のうのう申し かか様へ
最前名乗って くださらば
こんな難儀も あるまいに
道踏み迷い 山道で
とと様に 行き合ひし
すでに殺されんと するところ
観音様の 身代わりに
これまで送りもろうて来ましたと
夫婦の者は 聞くよりも
喜ぶことは 限りなし
親子三人手に手をととりて
観音様へ 参拝し
鳴門の渡も はや越えて
徳島指して 急がるる
徳島町にも なりぬれば(1)

我が家を指して 帰らるる
かくて我が家に なりぬれば
君よりの再びの 召し抱え(2)
元は百石の知行 二百石にも加増せられ
それ聞くよりも 十郎兵衛は
喜ぶ事は 限りなし
親子三人 もろともに
君に忠義を 尽くされて(3)
おん家繁盛で 栄えける
まずはこれにて 段の末

—「阿波の徳島十郎兵衛」末尾—

- 一 半二の浄瑠璃では、役人を斬り退けて逃げるとき、お弓が家に火を放って娘の死骸を火葬にしよう。
 - 二 紫雲の雲が棚引くのは、本来、菩薩や阿弥陀仏が死者を迎えるとき。
 - 三 お鶴は、半二の浄瑠璃では死んだままだが、柳亭種彦の読本「阿波渡鳴門」では蘇生丹という仙薬によって生き返る。
 - 四 お鶴の蘇生は、中世の神仏霊驗譚を借りている。観世音菩薩の靈驗となっているのは、お鶴が観音札所巡りの巡礼だからである。
 - 五 半二の浄瑠璃では、十郎兵衛は江戸家老松井主膳に仕える中間であって、知行をもらえような身分(藩士)ではなかった。
 - 六 国元の母はすでに死んでいることになっている。
 - 七 本作は祝言で終えるが、これは段物すべてに共通することではない。
- (1) 以下二行、土田の文句で補う。
 - (2) 坂田の文句で補う。
 - (3) 坂田の文句で補う。

◇付記 近松半二等合作浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」との関係について

替女唄の段物「阿波の徳島十郎兵衛」(巡礼おつる)は、明和五(一七六八)年に大坂の竹本座で初演された近松半二等の合作浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」八段目(順礼歌の段)に拠っている。これは、夕霧・伊左衛門、お家騒動と宝剣紛失、盗賊阿波の十郎兵衛と子殺し、などを内容とする全十段の浄瑠璃であるが、全体としては不人気で、初演以降はほとんど通しの上演が無かったらしい。しかし全体の不人気に比して、八段目のみは頻繁に上演され、「とく様の名は阿波の十郎兵衛、かゝ様はお弓と申します」の文句が人口に膾炙しているように、お鶴の悲劇は全国津々浦々に著名である。しかしながら、この話が芝居とは無縁な僻遠の地にまで広く知れ渡ったのは、替女などの芸能民によって歌い広められたからであった。ただし、それらにも浄瑠璃の文句の影響は強く、例えば明治の口説本などはほとんどそのままであるし、替女唄と同じく段物構成となっている福島 of 会津萬歳の演目「阿波の鳴門」(一九八二年、三一書房刊「大衆芸能資料集成」第三巻所収)は、文句も展開もほとんど右の浄瑠璃に依っている。替女唄の段物の場合も、拙稿の脚注から分かるように、それに拠っていることは明らかである。しかし、お弓が娘を家に上げてもてなすところや、お鶴が山道に踏み迷うところ、また最後のお鶴の蘇生など、半二の浄瑠璃にない部分があって、これらの独自性を浄瑠璃からの転化としてのみ考えて良いかどうか、速断はできない。